

30

29

28

27

26

25

24

23

22

21

20

19

18

17

16

15

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0

洋学文庫

文庫8

D 362

三
二
一
四

全



文庫8
D 362



三眼遺聞

中井氏珍藏

寛永島原之役邪教之徒を殄滅し長く禍根を絶つ
天下後世の福。」子ガ子は外。付 日本三眼の名を致せ
一ハ貞閥係大なり是役の祀我歎多。今所観る諸事
就て事の世戒。佑と云ふ解め有志の士を一て考る所多う
一も歎一。三眼遺聞と云ふ但諸言う抄示して統化する
時見者解し難き故。書内に島原之記とある一書を取る
全文を掲げ詠言うねまち西廻。貞信の依書す。島原之記
異之島原記の不載詳るまことに。邪教の事すハ島原の役。不及不外。且島原之記は當時の實録。文言は松川山と云ふ。すなはち。其事と云ふた
が事と云ふ。是を石之牛島原記。行かねば生ずる。是をう。固う當时首領の記す。不外也。多字

010190617926

41 7839

松木不眞也あへ候書直見を察まへ

島原之記曰柳 日本神國たりて近年、やうそもん至
國へ豊後も、こどもをねり、甚ふかくアシレナリ。かほ江ノ
秀忠ニ駿河 大井平家康ムキテスルん也。法度ハヨリヘ
きをねる内、メテ、ソムク處を偏るんりき。モレヒテ、ゆき
シテ、三井人ナ侍、ぬ御子少服方、小長崎ハ、うちお取の後、
わづけ人を數年、さみへ大勢きくそくし、所の事例、不
門だ善信ユロ法度、付様是、延喜十九年甲寅四月、長崎不
すむし、七百余人、てんを、ヤミ、いと、所、まく、ヤリ、
至れり、ちちつてある年、五百三百二百余三十人、てんを、

セキハ、めぐら、くつま、あわい、あ、せき、七、人、一、く、そく、
後、そく、事、
セキ、入、内、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、
すのか、く、て、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、
た、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
要、あ、す、物、
分、別、ふ、あ、ま、
セ、古、根、木、木、木、
口、二、千、年、の、老、木、
言、ふ、く、
禁、柱、す、り、
つ、林、よ、き、く、そ、り、
ロ、法、度、ひ、近、年、さ、ま、く、り、ナ、イ、ち、り、よ、あ、い、

あらわすにあつたまゝやうやくのたれ、家をさへすがまきす
うせんとて五まいとひもとひもとひもとひもとひもとひもと
やうかくはなぐり四月四日五月六日まよひもあく
おほきにそよぎあはれに長谷川左兵衛五月廿二日晴
りみるさくちゆうづのよるもろく日數るうす年八
月又江戸の山の駿河反かくたゞ木大さうすがま
めくらのてう書くうすはだ東とむすびまくらかくい
きんとく一人おもむきまくらうづからせんこさくじ
ちの収おもむくはなむ大坂社にまよひまよひ
うすまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ

英主の運命

日々大坂若狭あづま天下同宗度至りて少く同母。二年左年

大村不様也たういをもれりやうシテモアリ法度もいと
のへゆへるやまくは御相手をす。古度も事内に格々に及也
「かたむけ物」をもつておもひあらへどもひふ
りもせ也改めよ。先和也。要承上。年。まもくち
年。改。内官六月。上。役。休野河内守。後之河。せふくわ
轉。付。大。き。そ。ひ。さ。う。付。せん。き。一。月。ま。一。年。ま。し
ひ。き。ひ。石。河内守殿三年。ゆく。ゆ。改。た。ま。く。古度
寛永二年。六作中。来女云殿長房。ゆく。ゆ。い。故。傳。う。て
宋文。ゆく。ゆ。う。又。刀。波。寛永十年。今村。傳。四郎。改

曾我又たる友義ある十一
年八神原花屋達ち及弔尾内記般
山ノ内あつ十二年六神原花屋達
及仙石大和ち放ウツカニテ
十三年六月花屋達及馬仰三
の友義す年主子ゆゑく口
たゞまほをきくとくにみよてや
年主くわくね

曾我又たる反ひ候ある。十一年、八神原花屋町反弔院内記殿
せうかあま十二年、神原花屋町反仙石大和反やくわらわら
十三年、花屋町反馬印三番の反候に年生すゆゑ、口
たゞさをきしきとぞ心又てゆ年もくらむにさう
やうり、あらと13歳上へある、入さらつゝ者もまた
かくらきあつて名主の入でまつて、そりうる所とぞよし
とたゞやうひ金手遇す下まわ村里、日本固守とたる所
くあらためいすやう考へたゞ一人もこきあらまきもとぞ
ともううら、肥前はたかみ郡、三方瓦松倉長門守知行と
村多きをよきの村、佐治村中、二ノ村、三ノ村、四ノ村有島村

有江村太田村口津村からさ村や五村小邊村ちに村けのと生
國肥後八代増田四郎年よりこよもう年半、筆をもつて
つまらん才一揮舌きいと、術の名人也天子大ぞの大臣ふるあ
ま仕くもよ近づかんと鳥とふ。年久衰寧へ四金もつ病
の命をたまひか詮明るべやふまくとまゆの根やうせ回すも
ようきうそんはつて一枝かこさんやうそんたう鳥へ五段
まつつき度を脚とみと馬度を以てとく度を吉松とくと
在處久松玉はく林意海は度を初めのあ徒度度久松三度
在處度度は度を即ひう度度度度度度度度度度度度度度
有江村太田村口津村からさ村や五村小邊村ちに村けのと生
平年十四年ひのうの年十二月十九日世界末年正月

久松玉はくきうそんはすじをすうきうそんはすじをすう
称たすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうす
不そヤサんとめおの術めのまつて不そヤ運の至ぬり百姓とす
かくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
そふそふそふそふそふそふそふそふそふそふそふ
でうすさまのとまくとまくとまくとまくとまくとまく
すたまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
平年十四年正月世界末年正月十二月十九日

村へ廻り、小村、田へとす。付え奴又三尾次郎左衛門牧田長
兵衛はのぼあらるむ至は、まくらをそりつて、百姓方々、
「今食めぬ才う」宗右吉水足をきこむ。のまうか
十月下旬の午の刻、牛、馬の十刻もかげあり。の金嶋島原武者か
けよけ、辛條騎士はまくら方、俄ふくさす。一揆を以て島原を
とくべて、三十万石を島原へ。川やふたをせつけいひ仕事不
も。ナカヒキセキ、戦い中、百姓共かけまし。一揆六十餘才、博大
あじゆちよ仕手を以て百姓と我村とくらめう。博用とも
町火をあかせん。燒拂たまひ押あがめさん。生入城内
、

博用とも

町へ戻る。あるうたれ子の分、三十六石を石突

除社サクアリ。御身仕しよく。由歌音前後、おもと
鍋島信濃守、湯島年、因セナカ、スラムスノ仕事
後久る来る。核付、門を柳川、八船を拵前後、ハコ橋川尾
津尾、豊後の事。江戸、所用付、船舟附及牧使私及
、出田臣等す。

一書曰大倭落得の翌年、肥前主事郡太宰原七松原豊後
朝臣、主事西海、門子松金長門す。在代、主事、馬場仕事、原
安民主貪欲、用至也。謂日、人氏、主けき想也。
常益四郎、ヤ半全服後、八傳の先生年十、家業、放りま
却え、や竟、三百十の者も被り、年を下す利根第一、内玉春里甚

うれし。清和の久く。甘子大老を村原ふたら。若手のころ
ゆゑの法と申す。樹木人の間とくらま。物はよし。火を
あせ中する。佛をもじり。もあ特とだれをばく。五人のま玉。せ
六章。以て。甘子の内大老を。千束島。千手山。居。ア。庚
ノ。七。年。前。中。句。の。字。秋。松。又。人の。玉。ヤ。迦。リ。先。年
ム。ま。う。玉。金。灰。成。人。付。チ。連。す。ね。モ。シ。テ。ナ。重。ハ。未。年。
ア。年。の。十。月。あ。て。鳥。奈。付。ま。の。二。島。す。す。ひ。き。す。く。け。す
多。人。一。人。士。生。あ。る。」そ。ひ。多。子。お。ハ。ナ。ツ。ま。徒。学。で。ま。行。め。お。利
支。丹。の。佛。法。秘。密。を。悟。丁。せ。え。ま。」方。ま。歎。丁。山。や。旗
元寛昌与年端
西方毎夜立怪
之里因貢小波年

の靈廟祭儀等、其の一味一有生は未だ無かつて、年老といひかへて
之を以て而して彼の元
モカニモモ恋する
神の不間^{アシカ}也。又其年三歳を又あキツ國即ちヤマトと呼方御ノ合考一ツつ
の件也。

タリもぢう、すゆ万承左多ノ足サムキシホシキモウヒ
形、ねハ天使^{ミツバチ}也。信司改^{シス}テヤ^{アハ}、
色ハ島原甘子^{ミツバチ}ニ島^{ミツバチ}の吉良^{ヨシロ}也。御内^{ミツバチ}ノ又付^{アヒ付}ツタクナ生
陰生即^シ道入^シ。寛永十四年丁丑^ハ五月^ハ廿二日^ハ午前^ハ
上納^ハ、至^シ先^ニ為^ス原^ハ伊支冉^ノ阿^ハ立^シ家^ハニ^モアリ^シ支冉^ノ仙^ハ
御内^ハ、^モ多^シ多^シを神主^ハ引^シ猪^ハ友^ハ宗^ハ一人^ハ、^モ大^シ力^ハ、千鶴^ハ
佐喜^ハ同^シヤアサセ^ハ村^ハ廻^シましめ^ハ、^モ多^シ情^ハ、^モ多^シか
ふ^ハ、^モ宗^ハ古^シま^シの^ハ押^ハ安^セ教^ハ寧^モ松^ハ倉^ハ金^ハ銭^ハ十三^ハ村

秦詩

島原記曰島原の海に松倉長門守同右近父子考立江戸に賣金十
四年八九月西より而て送る為年、せ乃まひひ仕は由島原ヨリ内送す
文すいを、伊支丹初年一慶一了伊支丹宗のう後人寒五郎
千賀ヤマセ松西十月十九日出はれの時村多右衛門若右耳真宗門
のとき、仕家充する代也、二万疋、折出監織三石多良寅、大
多可松大屋、牛東多大屋、大正屋、大正屋、森宗竟、軒山多大
じ玉人の名もハ古ハ西織也、家へちも、林木ち以處也、往
來居多大屋、牛東の為也、行也、色年、肥方、多来
郡守に村居多也、通の士民多矣、云度半開所也天守

君上陣すはよ一人かたるを立て天下の種族は本主
時來陞き一級の事と御も貢言す。去向年五月廢殿及
北平傳法の天よりん下 日城の宗政一出来まつて東西屢燒し松木の花
生れ松火は延び満達 嘴ハ花人也るくも生立には山中より自旛をあらひがせり
みちか是の言をうて往謀セムシテ耶 すと身を付取ひて火を監視す者年三十ア東西
蘇州の傳法也ス 之雲修了子夥一ノ如く大にしたる極至アリ多才也。喉元空
いづ 大夫李勣之降す子が國行す是年六月、尋至越寧之國

元覽自武既末鑑。時節到麻
武將之撫伐可為耶。蘇宗之本意。由數勸之。座參會之首農等
元來耶。蘇之法外。三八雖授之內心。八尊敎之待之。故得勸喜悅之。則一脉同

繁多頗不過那蘇汝等之所行甚奇怪之トテ則奪取繪像裂之投火中鄉民等
起殺代官五人自殺代官上ハ不可漏罪科庶子可起一揆群集之鄉民ノ以近鄉
隣里之在所ニシテ交化宗押寄ニシテ殺害ニ在ミニ居奉行
代官以下急討殺彌宗旨ニシテ族ヲ催但ス

同書回徒當共戒。是旨二十三年。寺火。重付燒立。

墨を乞ひて國りて
そも遠むすむせん
有る失く不ま是甚も無くと云有性もす。吉利支丹宗門の事家を寛解もと御體
也。平生家業も
差し出さぬ事時。宗廟と勅迎年。正月後五年。郡主を尾臣仕ひす。因即ち云
まうるが、あうる
思ふ。却て勤め。生年。ナシ家の事。秋之始也。文政儒學人。戒法也
也。改めて。承。を免役氏。たゞらか。名譽の者。の内。四印也。かほれ也。
務もと更。家父。子。お。又。你。至。了。天。下。ノ。林。宗。考。と。追。け。れ。西。馬。京。の。一
か。り。と。土。着。の。刻。を。接。さ。む。方。も。國。中方。使。立。ば。不。良。と。或。代。友。と。付。教
後。モ。から。き。モ。以。集。門。一。操。の。徒。黨。を。食。肉。か。以。後。宗。考。め。同。江。主。士。任。ワ。ト。教
さ。ま。へ。か。り。も。

四印方、陳利和、南京、廿八日、軍評定、不許之、南京の内、欲

一秀曰島奈村長門守及山名士寧人共五十九人強劫其
所入教有毛手手又大考。柳門久教七百二十人至之日也
犯之者多手手而被殺甚人取死手心入焉。又之付
物。而手一揆共聚也乃共起之及早朝父豐隆也。及名と
打る人を相あひ露の害多殺矣。是り付左ケホノ被す
レ除フノ事為体也。教兄弟之の本役ヨリ宿す。少くま
日本ノ也シテ博内天神寺高門一人。子三千石斗按
三割付特ノ方甚矣。世の御惱事。事方政レ取レ取
島奈いと一秀南
地復國の力ある方難
かく自守

三連手子がひある
の活用をかたる
三方の義士は連々
手をひきて其軍
を打ちのめす
協同自ら久力と
一隊三千人とも
克リ若大冠四方
等内外敵却きゆ
高らかに立つて
白きるをもる

御用へおまえを集めばやうにまはくみ川柳原町へおまえ候事
只人の妻子十女十三人、てんてんと反覆する豊後守反応を立
協同自ら久力と
今在あり、おのれを立持つて、やまと町人の妻子十三
外そぞりと御用直政を奉りは立つてまよ付年序松風の海
内入す

元寛日記曰十月下ノリ松倉兵士押寄于深江村相戰て民廿四
忽付報松山乃為急勢也、正府國政於松原の人数武士等僕
役者大畠所へ走共之、左一族の中一揆執事松本有三筆多
係え急一揆、お屬不仕是騎馬武者五人足怪夫危々古河
人被討開き靡不這々高來城に逃乗る追討甚疾氣

押寄高來城下欲攻入長門守親父豊後守數年在此城高里深
隍構築櫓之間早速難破、城兵登高樓同矢狹間飛矢破事如雨
一揆忽土百余人被討退、兼引退然後、松倉兵士凡一揆等被呑氣
鄉民征伐之事造ハ不思寄唯一揆等ニ高來城不被取用心之外無
他城兵僅七百餘人其内勇士ハ不過五十騎

一書曰松倉豐後守立せむ時、島原の城。三カ五方主の接戦
死五千挙弓千葉數櫓立城、一年半より五年、立城以來の争ひ
口角争ひ内も其間二年ほど右大矢百挺五百同う上を頂
以降は内三十挙弓矢云々の退路を上了大坂名城へ入る事あ
まくねず千挙ある付掛多引ひる事五年の間數至一日又

墨落とし 桃花行と山江戸へ。空十九月十九日おや（今一左左之等村
やあ。新宿の内天子四万石奇兵無事也。かくかく全もまう）
四郎吉里を大矢也。除内上津戸小戸村先に十三村大かへ上
了めよ。かくらう。天子よ。内富國。梅高代。王毛。是多聞。中
侍。多度。正則。武角。唐使。山由。ヤモ。江千八世。ひた江村。多
多

人數一万三千とあきよ已ナ主まをき候。まをき長崎。故モ立候方
多キ者もさうしたゞく。南方より大さか由サ行。丁度もとち。サミ
ヤクシモ難。サムニ。南へ。北へ。大將。上は
志。あ。あ。四印。方。サ。毛。さ。ハ。長。行。ミ。先。か。き。舊。國。ミ。サ。ム。よ。う。て
左。ね。う。ノ。教。事。ほ。く。東。國。ア。カ。ト。十一。月。ナ。ア。唐。使。付。こ。も。ろ。ん。づ。の
左。サ。サ。船。う。き。リ。す。ミ。一。接。と。道。四。里。船。う。出。テ。主。か
ノ。と。の。右。う。ノ。強。行。ミ。サ。ミ。三。日。行。ツ。行。ノ。サ。唐。使。の。付。こ。も。ひ
た。ふ。ら。も。三。日。收。体。き。唐。戰。ア。キ。三。尾。藤。兵。内。忙。い。つ。た
多。門。林。宗。大。少。ひ。人。と。先。ア。テ。被。待。十。日。主。下。亨。奈。人
多。ち。ち。る。ア。石。子。路。の。と。も。鳥。國。リ。ヤ。國。ナ。一。接。と。も。舊。國。の。概

ノ御事ナガラセ二日ノ事ノ年トキニ其處近取爲シ其事の事因付
毛皮をもつ國爲仰仰トテ其外被れかの事石也矣大隊蛇之多
シナリホナリヤ一揆トモ三百余人ノ内中ノ一揆ミサカシカ
モ少部ニ上使也ノリ

一書曰天草の事起り。奇傳代官三毛藤兵衛
次非道たらう。起る是と聞へ遙く一揆か。付教さる

一言曰天草の事起り。奇舟代官と藤兵衛と年貢の事
次非道たらう。起る是事は遙く一揆か。討取らる
一書曰豊後府内。五年之も内附牧野松翁林丹波及草木
吉即處す。有月あり。久保孝友。其合土民。一ノ月の足り
多乃支也。ともすとすと山野馬内。少有。中宗。人
教す。う。黒被代官。長門左家秋。か。桂黨の。の。共大名。ア

以差及美義之方移アシカ也弱多々通國人叔押ムニ童名右三
人々弱收子江产ハ何故育ウニ左松才良國至マリモ内司
言仕古下トヨアシカ名ニ根ル也モ人數サ入ヤ

又曰右三人山同付元四年二月十二日於行家年三十日
先立至被相列ト侍二人以上三人然後子承考ノ於上
柱弱仰モ反向也仕後江产ハ精因次才烏系天革人
敷シキニテ至シハ在り有城焉主姓而後日レ高望イナ付人數
不自由ニキテ故獨主徳運ハ西國人馬若木序於平付た止
氏ハ猿弱參行也之江产下也ト行而皆アリ數多是也

凡篇亂の數アリ微少
カニ機械志存ノ為
小鳥蒙生此六國

又曰近江人數多江产下也ト行而皆アリ數多是也

リ御家数モ以付一揆共体難方ニテ取集シ全同心者多居ル也程也予
も足ミト天下を怪
輪達名居ト松延リ内ニテ數均ノ島原ハ人仰ナニ三事斗ト為不家取及人
人仰道トテ天子ハ一揆ト怪唐津ト加勢延門上右ト同紀
三十六

江产少不加勢延門上幕仰ノ者セキ斗トナムアリニ多セ
家ニ一揆アリ多シハ高子夫夷ノ者其大形右ト人候於て多
哉ニテ宣三月經少唐之役久付于向有ハ江戸ミシカ知立及小笠
奈右近將監及仰ノ指同一揆の數多ニテ中京人乃多其仰の
望四ト家アリ多シハ高子夫夷ノ者其大形右ト人候於て多
年原城仰ト後上使ト奉ニ付家
富元豐川少度ロ吉今ク付

又一書曰島原天草南アリ功支丹共島原領一五百家ノ五万村

王内不の古有、工柄軍全を據て掛不^レ修功^レ在掛^レ改^レ米
を^レ遠^レ先及^レ元^レ海^レ以^レ方^レ日^レ數^レ皆^レノ^レ 言^レ 公^レ私^レ公^レ私^レ
ニ付^レ近^レ人^レ數^レ押^レ之^レ近^レ門^レ依^レ之^レ内^レ要^レ寧^レと^レ調^レ及^レ置^レ海^レ
一^レ支^レ曰^レ一^レ援^レ大^レ將^レ四^レ郎^レ、南^レ北^レ中^レ大^レ行^レ十^レ本^レ五^レ段^レす^レ
考^レ其^レ口^レ集^レの庫^レの^レ存^レ主^レ取^レハ^レ人^レ數^レ一^レ方^レ二^レ千^レ土^レ千^レ石^レ用^レ
見^レ崎^レ等^レ水^レ時^レ、陣^レ主^レ也^レ、使^レ之^レ宗^レ門^レ、方^レ主^レ也^レ、
長^レ、押^レ急^レも^レ方^レう^レ少^レ火^レを^レ乞^レ燒^レ前^レ、十^レ人^レも^レ付^レえ^レ此^レ所^レ
多^レ大^レ事^レ後^レ甘^レ子^レ高^レ國^レの^レ海^レも^レ陶^レも^レ也^レ、布^レ海^レも^レ也^レ
益^レ於^レ此^レ、降^レ也^レ、主^レ也^レ、也^レ先^レ上^レ所^レ也^レ、之^レ數^レの^レ同^レ主^レ也^レ
追^レ月^レ三^レ丁^レ、用^レ乞^レ也^レ、而^レ甘^レ子^レ上^レは^レ也^レ、往^レ也^レ、改^レ

か、唐事ち事まくは、事の富國哀と一みまくうす。打あんと手に
高きをか拂ひと拂ひぬ。やがて成らう。四角い火を燃え持つて移る人
教子みちく。古事記元年。而刻天子の歎う。

天曰一孩、天草守を幼之をか。東後以爲く高國の博多攻人十五
内有ナムモササギ子守の村、使至主味方、乃まも村、相馬
ノ守安佐村、毛教宗民保之或、山守、近茂守、又、毛守、地近
方角、大形莊子、近江守、鳥原守、陈以後多之、伊賀守
主原莊子、守、甘草、近守、庄子、毛守、内、少担物、大將
方守、下守、一揆、甘草、守、社、十九の守天守、之教之守、大將
益田即同甘草、守、毛守、在、陈、少担物、大將、主原守、高國、

押あつしゆき一揆（ひざわら）を立（たて）、白き木路（きのじ）の多物（おほもの）をもつたまき
をよしめぢまゐらむだる強（いのち）くせきりうす軒巻（くわんまき）を仕舞（仕舞ふ）くるまき
立（たて）先手（さきて）の者（ひと）は多く、たゞ私（わたし）をおき押あつ連合（れんごう）をもつて
きく昔（むかし）後（ご）を惱（うなう）す。首（くび）をうげせ後（ご）をもつて頭（かしら）をもつて
強（いのち）めこゝろ打（うづ）うちめくせきをながめにけり。勤（いそ）めまつま
駆（く）めまつま大手（おおて）の夫夫（めめ）（夫夫の跡（あと）今も在（あつ）る）
足外（あしあい）の食（く）をもたらす。女房（めめ）すくらばねきも味方（みわが）の
手（て）をもつ田代（たしろ）の右衛門（うゑもん）川副長（かわなが）をもつて、すくら侍老（しらう）の女房（めめ）共（とも）を
ナフヤ女房（めめ）をア付（つ）重（じゆう）と宣（の）か物（もの）を拂（ぬぐ）へ食（く）をいふより少く一口
肉（にく）をも拂（ぬぐ）かぬ豆粉（とうめん）をもつて、霜（さむけ）のぬくも入水客相（あわせ）を也（よ）被（は）

入下女房（めめ）おも内（うち）おも持本丸（もちほんまる）中（なか）を防（さへ）ける竹争（たけあら）をやま及（およ）んで下（くだ）、
道口（みちぐち）を明り（あけ）、極右（きくう）の家相（いえあい）をもつて通（とお）り、長（なが）く寄
りよ處（ところ）をも被（は）と短く切捨（きりそ）男（おとこ）をもくらむ働（はり）りたる落城
兵（ひょう）をも人手（ひとて）をもつて貿易（ぼひよく）をもせらむ。男（おとこ）をも氣（き）を付
ふく。又呼子平右衛門（よしらへもん）の女房（めめ）は富墨（ふもく）の五里脇楠浦（ごりわきなんうら）をもす
居（ゐ）てゐる。車（くるま）をもつて着底（きつき）をもつて富墨（ふもく）をもつて、その時用
も立（たつ）りの平（ひら）をも常（つね）く以（もと）て女童（めのわらわ）一筋（いつすじ）、又のゆきを也（よ）
居（ゐ）る年（とし）をもたうとぞ。豈（いか）誠（まこと）す。秋（あき）の女童（めのわらわ）一筋（いつすじ）、又のゆきを也（よ）
中の爲（ため）を活心涼友（はつかいりょうゆう）とぞ。身代（みしろ）百挺程（ひゃくていこう）有（あつ）まつて寄手（よて）三年余今
中（なか）十五間立間（たちま）を計（そなへ）。矢（や）ニアラタケ（アラタケ）了（りょう）志岐（しひ）と見（み）る

使あと指越北城の松原不満い城高く城外見は秋興は
一何と攻すも西邊了者うへよ十日以内に奉手を之教
まきまきひを養え門内を之再三仕立ひ事とも他事とかや
りまへるき者のみすかと我あめ功臣、侍臣てまつれま
ま帰れま付ま希と年暮れ　跡より城主の者まじ此城を考
さきまつて男女一人助かる者まつて行者まつて石を合合
まつてやうと行ひふゆめの者まつて山産アラシが城の
佐治玉手（今見城中）蘇復ひ男手ハ是ま行ま已む利
也（以爲失手ノ利）

佐々木近向諸勢をもとめ由サ付ニ至高村の太田吉良を拘束

書がき、無事とこありて立宗門にまわる。西門へ入
る。かの打教味方を申み天草たゞく一ふうう大将を拉むと定
めとす。かの味方の持つたとく全人數方私也か。かの大將
ヨハ倍田四郎尉室二の丸大將。有島持邦重政。三の丸大將。六
有二監物足以知。正^{ムハ}急崎對馬守少之清。ひら甘保^保忠良
在内。左近の松島守正有江休意大兵衛淳義。里移。八口守
柳原左近^{左近}ち。佐久の園田守義。主座良太翁下
侍良左近の葛尾前^前。大矢守五右衛門。但馬守在澤守志房
女都守三万セ。多佐務院五右年使。源間一右。之ノ御子を室
詮主^主のあをとおれや。西門に上り。板倉内経及左谷十

承及松平家と不友相處の事無く子共を以て向ふ先有馬の
差遣は松倉長門殿・同左近辰人殿と云々とて關島反人叛と
云々とて東西さへまことに十二月廿二日山中やわらかノ數箇をも
ノ村々百姓ども一人も多う也所れをさへとてひよ役科系籍
ほて度鳥傷三千人をも人云々鳥安方浦及三花庄持置及
安西ノ十一月十九日云々たゞく天子の之を率め方舟ニシテ
ヤムシナカニシテノ船を了候ひと松平毛利反鳥傷三千人
反ト諸勢一ノ同有馬宗少海・十二月廿六日云々とてナリ・矢合
諸勢降ミテえろう天草の上夜・ハ松平サシナラ及林母波及
船主伊集院・又内野・又内即後サシナラノ船を平リテ天子・坪

あやまち一揆とも本ノ御ヨリすすむ付方主翁村主さきア
老病ハ詮空のあすアヨリ國より出立五月初二月ノ前有馬主翁及
久里島監物立在處ナシニ五月初二月ノ前有馬主翁及
五月初二月ノ前有馬主翁及
久里島本村松代役ア大村ゆゑ十二月四等三月廿二日奉
ゆきて強更主翁より降す。眞原翁のすその屋先を生ひてさひま
多加キシムアスケリモ折からぬ日年未昇昇思ひの少ね
わざるゝ萬葉主翁風もあまきへ事まつハナシとも吉宗の
衣もさくからそがひそまう相を京を下すもまづ折く國の
船を數艘うち秦野の幕奉を下りてさきの定の役もの

船手はまことに多忙の新間の秋の吹風、歌をもじらひておる所
の傳はす。名城又四一里を二方へ海二方へ山へ石垣の車走と
の及ばぬ處安堵ゆきとすまほとほたてこすまほの万程
かやうかく我我才をもすやううりゆくが林中をもすよほ
まほ石や木をもすたせのひう

鳥原記曰一揆の後まにあつた様の事とひくやうとある所毛
立松の上の板倉内移と重昌山頂附。ハ右谷十面もくと
宝月山はは戸立極月宮。松倉居酒屋と下木生檜
省内豊後森内移と伊豆の物を傳る林舟門と又也御引
馬場とそつて走年と。洋儀江戸とすすみハ修二三事の

色手とまの和泉とひふ能と多角りと成りて有るとお角の
アマモとまのとみと保之隣りと船と船馬傍とそろの長所へ
門先手とそと西向支丹木とまの付聖使と付近付
てそとすとまの極月ノと馬糸の傳うと多角とお角と
西向開船主手般と吉ハ船馬元板倉市と馬糸主花庄斗と
断二万束と人船拉月ノと舟と御舟同十日止と款傳及モと
堅國の傳化と不とあゑ案とお見御天仕事と甚款傳と
安計仕事と不とあゑ案とお見御天仕事と甚款傳と
革肉と東京陳充とそとば附と船と船と一機内貢時と
毛糸無精とほとまのとととととととととととととととととと

テカハ種の御沙門寺アハシニ高木ノ内ノアリセテ
又曰一揆原傳と云立松月耶。うす無清トテ古の内ニ
柏花松城トテ東西の二方ハ海岸屏風ミ立ムシテ
船を立ム松木トテ東西の二方屋モカドハ海國之一揆先君
傳の事分之。尼の波人モ主ム並清ヨリ南ノニ叶ナ大府
直見ミ松モ起ア火の火矢モ防波石モ起ツル馬頭丸人松
コ入江舟モ通ア高勞の脈モ藏モ松木万株ニ高勞ニ三木余の足利
以迄傳するル。金壹万束熟勞三万全柄石モ浦底モ小舟
天子モ名モ付ニ字の先々要えて替て天子四ヤハ芳ラ
き。丹波守の御子一ツ主モ君幸本ヒツモ室の正也

完智諱人ニ歎ナ。寶外牌品の名モ吉利支丹比集。松傳
古先大手傳と云ミ。また通ヒニ立山候邊の松木モモ高勞
玉効え長ア至丈卓ヨア傳松也。三人ヨアサア立傳ハテアセ
人有アシハ村の大升もん。そぞうサモキツツヘおめやうて厚
松石大矢ナ直手ナ。傳也。ナはた庭下と有社奉主モア
手の矢陣記司ミ立松白き布旗モ五万疋方一干疋也。ト
立手一矢アテテ。ナはて云々。物事ミ立手モ一ノ室。後院ナキモ
セテハ松木。うるじふ。傳も多氣哉。ナハ前事也。所少小万於五旗
四百也。一本家方モ七万或ハ所モ。構わロアハ。傳也。トテ

是の豈後山内に在り。四年春正月、次第御
子とて被有瓦之奉。是乃其事功也。丹入山以於其事
寫理。其上怪也。左右至其行焉。或曰。聖
人高足同吹者。而身一毫無也。三友。也。紀也。是
以爲五。左右秉才。右掌于焉。左方者。右方內
外。人多。成方者。右。門。也。所做。也。責。也。以。何。有。代。也。也。也。也。
參政。猶。子。能。不。為。東。學。之。子。自。多。年。知。以。考。而。批。子。如。
卷。也。年。也。缺。也。云。其。蒙。實。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
以。考。時。也。利。也。丹。共。也。及。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
抗。同。也。考。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

キス島を切利支丹、桂宣と合アメニ一揆の侵攻に於
キス島を守り、本丸は其不桟舟のやうに倒れ立つて新
羅人船、表左衛門がアメニキルサリ切利支丹官船と對面往
き立つて今度アメニキルサリ船打てはまつて古河をも見通
御代アメニキルサリ船遠見し五方を包み化山をも見
通する船斗アメニキルサリ立つてあがめる所アメニキルサリ

書曰十二月十三日上使板倉内膳及石谷十兵衛陣下へも
宗光呼あとも改めま候て又上使アメニキルサリハ城を改め
シテノカナ左多岐三味方のノ役の候てまことに拵る所すとまゝ立つ
らハ心腹御まほアメニキルサリトヨモキナラニ成る事無ひ矣ヤけ

アメニキルサリハ城を改めま候て大勢を換アメニキルサリトヨモキナラニ成る事無ひ矣ヤけ
同様に先將の改海城ハ城かば形似する色の木立又て木と之
此城ニシテ廻を仕立ニ方ハ海二方ハ泥沼も地の利能く城之先
港を二方ハ岸アメニキルサリアメニキルサリアメニキルサリアメニキルサリ
山のみ二方も泥沼にて岸高アメニキルサリ人數アメニキルサリ有りて自ら船を也上置す先
城の改海城ハシテハヤクカミ京をも又しメトキアメニキルサリ移士の數庄
田中由ハ直す卓識アメニキルサリ國事を却す改海の法ス三方す以方ハ明りテ
アメニキルサリ直矩の言葉アメニキルサリわきよひ也而ハ城手のアメニキルサリ刻するめ古屋人降人アメニキルサリ一方
桂宣御主事松井忠正と改海の貢金をやもとと存す上宗門尊敬
アメニキルサリ人アメニキルサリの仰有人アメニキルサリ大も古もとと國事人アメニキルサリうなづき

暖日暮久多羅づめニ
マ教モ因リニ教ス接
兵ヲシテ東突厥の
寇ヲモヘテ旋モハシ
ヒシテモ滅滅の上策ミ
ハあらま御とあひゆ
城と寺ヲ侵滅シ
シテアラ柱石等も
きくあらむ必利
の充多々斬りき
さあたま

承年の義翁義翁の書書。柳生柳生但馬但馬宗矩宗矩ノ私處私處重昌重昌の詩詩文文不不可可以以讀讀。柳生柳生但馬但馬宗矩宗矩ノ私處私處重昌重昌の詩詩文文不不可可以以讀讀。

多聞院へ行かうと多聞院へ向かうと
さすがにまだ仕事の為に外で仕事がある。林山さんとも
十二月十九日は朝から押さえ詮紀をこなすが、おひる元
左近及三の丸へ是も同時に見学を終り、帰るま
ちあけすと食事やうに車両内室をまわるが、
弦の多い車両が何處か十数台止まつてゐ
船の運送をする船や車を多く見
る方の車両を搬送する車とおもふ。
車両を引く車を牽引車と呼ぶが、車両は
車両を引く車を牽引車と呼ぶが、車両は

魚原記曰止以土作底木板塗漆
立花山一間後半也
此中半也
松倉一家、瓦金三萬
五石八五石歸之
五石也

一書曰每口言及之口鼻方人似多主於口鼻口鼻宜以天上口及大指
參之又以鼻之筋由鼻出走中指

子ウヤウシは、松平伊宣を及戸田大内に附さしテナニ月廿九夜
まきと五十五日、まきと一ノ内膳の名を許す。また勢がくと
あらわのそむの一揆、まきとまきと今處の行方を問。官す年元日
の御上りの御事、ナニ月めりの御事入官の列、兵部及本多

馬切代前代大門告因年。さきとくとさき。御承の侍大勢
時事多きからず内経及す。似て之御内及度處所に及
か。又さかんに内へねり出先とが。ノ城内うち、そ
不肖セリ。方を有す。ソテニシテ、事もあらずたる。故不
了れ。車陣は自若き。内経及多矣。三十歳及七十歳
内経及れど。其事無く。内村上源之の體四十加
代内即ち。松田也。志しきとさき。了事。手本取
人。身作湯島以侍。禍焉节力大不取。可外服立心子。墨縄
人多死。天人。松食所。物難。六十寒。正月。因。名。高

右馬の陣に於て木の内をうなづいてるの外の物
をあらわすと、すこしもあらへたまきそくと
せんすすと、ちあくうさうまうさう筆の事は、
かく石火矢のうそと、たゞちあくういふと、おと
きの袖のちあくうと、おゆふらの筆をうそと、
生の馬鹿のうそと、風情うそと、かるほんせうと、
一書曰京都板倉周防殿了内侍也、使者了に六うそ
ウ名代松平伊豆守信保戸田左門氏強下向之有正役十兵以後
至達傳説了りやうる所の事も身を盡す誰うそと、
丁度何うそと、おもむくはれうそと、使者了に使ひ方うそと、

西上以之食。自是岸の事。おなじ方。中間ハツシ仲。乃は丁と
オカノ板東。よのびゆかし明。ヨリ也。其事。アラニ。城。ナ
ミタ。シキ。阿等。モ同意。板東。アラニ。事。也。桂。マ
ル。シ。其。アラニ。アラニ。

書已畢。教其子博同。以爲奇。多矣。
每聞。念前。如久。已矣。不復。可。同。其。子。之。事。

島原記曰江戸の爲めに萬葉抄伊勢守が代友と申す
中東

松倉以外で、さうすうに、物事の裏面を、たゞ窺ひ、別々に、詫と
おけ取る。併し、手ては、庫勢を、多く、松と、も、持て、おけ、以松と、
更以て、陳狀。おもて、こゝに、打と、成、其の、中を付脩め、も、控え
」坂へ、倚る、上り、降り、實大竹を、走る、投宿した、是れ、松
毛庇門より、味方を、負ひ、死人、重ね、殺され、まことに、有る、手本、説教
惨あつた、門也。又、肉屋、說元、掛向、うなぎ、大将と、計らつた、競
罵、對面の方、抱持の、時、人殺し、免ひ、有る、只、口の、争ひ、争ひ、
古い、故実、を、少し、ほの、物語、一處、が、紹事之、内経、前席、うつせ、
ゆき、多き、五年、一月、序、年、初、掛合、事、不、至、め、云
月乃、ヨミ、五、三、中、日、未、換、申、叶、若、追、後、年、付、意、元、後

不入焉と云者も又詮義區々多うあるやうな事多々元日より至る死人
大う有ニ付味方多力也勢昂り居黒因細川寺澤也人數五
多也次三千餘方ナリナニ其事

功支丹。日本ニサシテ。出井村の五十九ノ一處降東。内
ケ系ヲ傳テ。トム。相模國。四年。妹送。山分新舊。傳良多。若
出生。トモ。彼ノ達志。ふそ。嘗。モ。トム。御。委。傳。既。城。年。三。至。リ。モ
不。居。ト。若。今。莫。京。度。至。馬。ト。東。門。作。日。先。代。の。ア。シ。リ。テ。是。
未。シ。シ。ル。也。得。内。一。換。内。舊。津。刑。部。也。部。源。ハ。シ。ム。以。來
及。年。松。度。及。給。手。大。之。作。丁。先。代。主。公。ハ。大。之。作。
立。もの。主。物。ハ。秋。云。比。ト。先。文。主。内。通。多。月。更。次。次。
少。數。母。手。リ。メ。下。方。少。政。ニ。セ。リ。サ。お。國。ハ。口。多。主。ハ。大。之。
上。ア。シ。ム。期。ト。レ。ト。勅。ミ。上。テ。中。君。方。時。シ。ウ。多。名。リ。ト。ア。
ヤ。俄。刻。入。日。島。モ。ト。五。ノ。矣。文。射。ヤ。シ。ハ。更。矣。文。射。ノ。多。

技。ヨ。辰。ノ。二。行。内。通。歌。ヒ。ト。大。將。四。ノ。有。江。監。物。少。有。印。叶。捕。寒
成。敗。仕。ト。ア。作。平。ハ。少。多。ミ。ス。ノ。付。三。ノ。ア。レ。ハ。五。國。の。時。少。富。景
右。也。大。主。モ。生。捕。ハ。被。る。室。門。の。臣。儀。一。和。ヤ。放。五。モ。シ。リ。少。
少。保。ミ。シ。ト。一。志。五。ノ。ア。一。機。今。ハ。終。之。室。門。の。臣。禮。ミ。シ。ト。
カ。イ。お。日。里。東。モ。守。ハ。シ。高。ナ。モ。二。月。紙。リ。付。伊。豆。モ。志。底。無。爾
ア。ト。由。リ。ト。モ。降。ア。ト。上。使。ミ。ト。下。鬼。鳥。人。教。移。ハ。ア。次。ト。是。
之。す。ト。少。モ。歸。父。あ。ト。少。ト。少。モ。行。ハ。日。向。寺。二。月。セ。ト。是。降。於
而。傳。向。モ。シ。ア。右。モ。シ。曲。傷。の。處。シ。ト。シ。此。也。ニ。左。モ。ト。右。モ。傳。於
ナ。シ。テ。モ。シ。ア。テ。ト。シ。三。ノ。處。モ。左。一。所。ト。今。ト。第。モ。傳。於

一書曰元日の合戦の次子たゞは
久々に死んでいた
芳こう上吉は馬鹿に生きてるが
弓矢馬（血氣盛のまゝ）博多城
を守りたる。吾等之を東方へ
大坂の利（手）事年一役で天下の軍を以てゆるとも今も敵
敵の軍を以てゆる。彼を云ひては江戸の如きの如利（失
事）焉れ（失）免されぬふとやうの如きを此處の大名之
方より甚矣（其の而て又はかくさう）高宗の子孫（傳）
將のみに至らすを自由と謂ふ者少将の至り得

伊豆守ぬかはまおもてはり代の利根川上定葉必
夫は松山を去るを以て御政、付はうづか、伊方大老が移すたるの
二ゆ年たゞく只海を、高船を三度、相手に三度と仕廻す
至人、かきむすび手本數、て身ナも味方移せざる次々と移す
省也。上支へ方の道、ひりは候あるべくすむかみ丁物
刻々多水に困るゆゑ、作事をばあせ相、うなぎを以て相應
云然の如き博中と同のゆゑ、足利大扇と呼よばれ、病
氣動ひ水、博中と同のゆゑ、足利大扇と呼よばれ、病
氣動ひ水、博中と同のゆゑ、足利大扇と呼よばれ、病
氣動ひ水、博中と同のゆゑ、足利大扇と呼よばれ、病

元寛日記曰正月五日細川人數押入有間初大守先鋒松倉長
門守舍弃右近也些尺自養身至今年度諸處之陣人數
大勢討櫻賀草毛病守負微勢之先守不叶ト御同付衆
追申之依テ伊豆守相計幸細川為甚守依テ壹替之寺澤兵庫
頭^モ有間着陣寺澤軍兵於所若干討レ軍役不足也

又曰同十五日伊豆守詣大名無移。右請申曰。各御存知之。而信
綱率前謹御代坐坐之庫。今度始也然。八度。武功之面。恩
召。相達事可有也。共將庫家。蒙御意。旨信綱下墨。
此城候又上意。不異仍テ止ノ城攻送日事非別義。一揆之奴原數
方人掛命于此城。植義故以前寄守若干討死入城無双之要害。

也攻口之足塲應ノ守手少勿之進退不自由之非平塲庫故
武士農人之無勝劣歷々之勇士為鉄炮大勢無下討死不信
敵^{敵を知らぬ後}綱^{五兵衛了と云不可}巡思策築城人數三万七千余人此城之結構也兵糧不
保^{保有する事}多及飢一兩月不越又謀反入築城セハ急ニ可攻是天帝宗而已
天帝宗^{天帝宗アリ}也^{モテ}火急攻城庫兵大勢討事思慮短处也上意之趣モ亦然
モモシガ方矣示^{モテ}幕^{モテ}

リ諸大將之陣ニ軍付粵塲極樓以大鐵炮可被討云皆同上書
之上奉果面々飯陣所各攻口二重三重振柵築山極樓竹束置
箱特箱衝突ミ城近付仕寄合打大鉄炮又伊豆守下知自
長崎大船四五艘召寄阿蘭陀人令打大石火細川黒田隊五十
余艘之番船於海上大石火大鉄炮如打入依テ堀門矢倉被打破

無修復之晦於^{シテ}是城中天者多城兵數千軒之陣屋共悉塙地如土藏
游土塙^{遊居ス}

又曰城中山田右衛門作ト云者彼才覚勝人博洋嗜諸道弁舌利
発之者之故鄉民之棟梁之木丸持口放逐其隨一八百余人之大將也
山田熟業乍在吾扶桑之地相背國王之主命不知異國之夷之
莫^{モテ}不^{モテ}也^{モテ}此一西工^{モテ}為^{モテ}捨命欲滅吾國之條相背天理人望均畜類爭力可逃天罰吾
當為^{モテ}山の雄^{モテ}尊所之本尊號天帝ト云是天性也背天性者豈為成佛大
惑^{モテ}改過勿憚八聖人之教也早屬武家勵忠烈思吾手之農人
八百人時^{モテ}諭此理皆尤ト飯伏^{モテ}仍^{モテ}孟春下旬認一翰有馬左衛
門佐陣中^{モテ}射矢文^{モテ}被責當城善兵八百余^{モテ}人真似防戰而放火

城中之諸嘗其後郷民等可參御陣但其駆牲于四郎之居陣可落
ト称取東小舟輒生捕四郎欲勵忠節故廻思慮小舟少故用
意之云此者城中隨一之民首之偽引寄味方可成計者不及互答
山田重元武家深志之意趣不偽之旨表返諸社牛王則日本之風
俗之誓詞且南蛮耶蘇宗所用之誓認西通射矢文此上無子細
定城攻之日射失文于山田陣山田不知之夜廻之者比矢文之
捨ヒ令見四郎時貞大驚山田以下輩思一向之耶蘇為一方訪
然斯企逆意罪科甚不輕然氏依天帝之眞加今忽露頭申
搦捕山田則捕其妻子一族膚座殺害其後召出山田四郎尋
子細川山田堅陣不知四郎聞其理卒尔ニ不可殺ト揆諾義入

置八百余今ヲ入定召出既ニ山田自狀セト遂意之事穿鑿又兼テ堅
マ契約レケン磨山田ハ白状スル氏吾々ハ夢ニ不知ト一樣ニ申ス八百余
人之内何レ一人詰問スキヤウナリ其終是ノ間ノ

島原記曰原傳う矢文御内越すモタヌ射カニ左兵衛乃シテ左近
伴千石字少室百子孫すモタヌ御本丸改テ左利支丹ミ字右近
音モナ名考別字ミムシテ不事少テ左兵衛破御後
天下御教ノ及シ左兵衛左近有度ノ達人仕耕平生生大手難遁
在多ハ信シ高宗之御内也少少紅明禪剣非人所作法或以爲
庫或極寔迫降另處京天奉被夷教平芳外志人之ノ情
卷第也何夷也從阿五度數度也之京御下私心也

私不思量天子之能御也。先被以火攻，又蒙全军以私怨，
委身于彼，而我之士卒多被掠获，於是以致敗
亡。臣猶未盡得其意，又恐有余言中天王情厚生
言。此所以爲原力度大半空矣。非所以成以義
教以非邪政也。

卷之二

諸々多忙の後よりもいさぎ
五月初一月廿日お定めす
天皇の大御所をあらやえ立
ましらきかく御内閣外事局
かげりかどり手を下る
もの多矣之に二三日うち母
の心をうながすとて之をハス

まつまつ天子勢をもす者へ六月の朝ハシム事と生焉
及陣の左大臣をもす者と右大臣依及信濃守の所の櫛と
さくまきの事と高さちよちあけ時とくに草はんをもんに成る
さくまきの事とあらわせんと一時とくにひきかげ
あらわせんとくに天田の山の内に堅御父の湯と
お田舎者鶴育はんと庵及侍のアサヒの竹をかどりて
おもひしとくに多額不人ともあたる者と
おもひしとくにかくのめかくのめとくにうがくとくに
おもひしとくに日本とて日本とて日本とて日本とて
ハシムハシムかくのうは一揆ともかくのうとおもひ事ゆゑ

かくすむ事多めあつた在りて前原うきよが引て西行
のゆゑ水のみにせんまの所うちうつ身の内を
詮見る事無く立候て度て水を取めかねず二吉は昇る日暮
乃ち半夜より物語の如く身及び火難の大物入るゝ事承
付く事なく大難の心と教ふて是の間も未だ
百丈の海の事すれどいづもと同音するく宗門を以
おもやせもへ定めし事母の内事おもへぬる事モ
少くねえまし事母の内事おもへぬる事モ
あつておひの舟陸にみゆき事母の内事おもへぬる事モ
傳ふ事母の内事おもへぬる事モ

寺傳 鶴鳴院の町を下すと左に物賣の町を有すと申す
中多良村は是ニ揆共集ひたすアリ お及く村と リツリカ
ケテ路傍の寺を至りて西方より是を寫め大字 村毛也
居したるを有江口ノ御門川又西を天子橋西門也同
旁に四印丸跡此をえて傳訊を上せし夫ハレガヨモ物賣
静山の歌詞曰く 実生年紀是沙木佐代之又上若うと傳
ちゆ林木を付根の木ニシテ木ノ根を引かセテ少不被傷及付
難本木の木立を有柳木御上山後黒田腫鴨 黒田家元
勝成 物語少々能成の云誠以不惜金錢仰以吉利支丹
越すの身若希の事多也

元寛日記曰夜討評議城兵一度時ノ発シ城ヲ拂打出ル休ニセハ尙
手堅勲可同士討敵若少モ引攻ロ兵糧鉄炮玉藥奪取入置于
城日本國中兵攻之輒不可落則相仰ノ將相詞ハ善致ト同ハ
須テ留ト答ト定テ夜討用意ス

摺きテシ以テ陸地をうたせ更に祠を五年空役と仕かリテ秋ハに
テテテハ作モラムトサニ秋ニ至リモウシテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテ
テテテテテテテテ
テテテテテテテ
テテテテテテ
テテテテテ
テテテテ
テテテ
テテ
テ
テ

終ふる湯島智衡ちねん一也人をいづくちノ出ヘシ多シカ
けりよか室のたう立は林木たるに湯島智衡と及大本寺
御島安義じんを先て出ぬゆけあがくとれゆさむいろ。小
名。やまとせ一也は雪舟がさす候多きと見ゆ。後條うめい
おアユ戰ひてよあけのう一揆共にさきたり。ナヤモト
つよひあらうこくとまするたのえこのこもくうぢるをも
タクちの門院百十の戸付ものとる。木乃りの口もとく
きより。後勢布内もく。まき。我アシムナのゆき。うちのゆ
石垣松草の佐内。一よき。さき。移ふきのうもくわくと
てき。とくまき。とくまき。御川城す。石子。是。海の方。うき。

有ゆる移とく事もあらまちを五万引を今きは
そらきとせんきう十二三とくまをたつわすもあふるも
ちくはかくとくまきうちからむよハーナリ。二八三
まちかくはくまくまくまくまくまくまくまくまくまくま
西もまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくま
うちもくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくま
人多くぬ青引りぬある。二疋方木を貰ひて取れと一万
手前方木の木をかくす。都合五万引をもと、ナムア
シテ木の木をかくす。車引ひて車引ひて車引ひて車引ひて

島原記曰二月廿四日の早朝、伊豆守信綱の陣に、お手の大名が參
致す。是れもかくも季子の精霊也。戸田左門道若と手本に戸よ
り出で上役となりて、之を族姓に於て至らしむる上主
の御無事御詔を、官室に安置せし。且御幸を以て之を
奉教す。伊豆守は、此を日向守と申す。而して、伊豆守は、
只そくと後とも口を多きを嘗て、方々お嘗て、小指固くもてて、
其の掌の裏を、又多き墨反の面に仕様成す。右の名前、吉能守
と稱す。其の本姓は、山名氏也。而して、其の子孫は、伊豆守也。
伊豆守は、前度守を以て、次第に之を歴任す。而して、十一月一揆
時、守の御子は、江戸に歸りて、其の子孫は、守の御子也。

ひのさうるそ仙神の歴と崇天道と云ふぞり。下村の御所の侍
侍、代官を兼ねて、近平と称すやかま一きくすとす。又後
友二入差すのつゆとある。ヨリ古とて移住か。内もふ知もま
ま。追手の追付をもお知り方。お軍隊たる在所はだへ。或
ハ軍頭も。お軍。仕事服をもあらじ。船と左角と右角と
ヨリ仕事で船りしとす。たるうべから。六戸田左門。きのね
在す。侍者と申す。而日向をえど。左門能とぞり。支ハ前座
す。いづれと申す。ひきと申す。ひがと申す。す。多と申す。引歎
の侍とも。夕待とも。おけ上の兵部語。不そと。ハ五つと。到く板原
内終。計を以て。各ニモ。三と申す。や崩りて。和合。少云城攻。

信傳といはれ。す。中主配。下主配。源左衛門。河内守。鷹鳴信傳。
子とも。の義。ハ。院光。と。お。松。信芳。傳。の。よ。め。付。翁。ヤ。レ。有。明。ア。ト。
ノ。做。キ。ト。信。傳。シ。松。平。ち。ハ。上。の。曲。傳。出。居。シ。キ。ア。ト。ナ。リ。ミ。サ。ル。
ト。朝。ミ。山。作。ラ。ミ。風。シ。松。ミ。シ。ヤ。ル。伊。里。ち。大。門。あ。ハ。下。御。清
寺。モ。ヤ。ル。ミ。モ。一。度。の。底。水。望。り。而。モ。意。花。序。モ。口。火。也。松。年。左。の。信
有。鳥。玄。高。内。寺。同。序。ハ。有。鳥。大。身。信。同。高。小。室。系。久。道。同。
信。傳。の。元。國。甲。斐。ち。同。序。ハ。有。鳥。大。身。信。同。高。小。室。系。久。道。同。
長。門。モ。ア。リ。中。一。度。意。花。序。モ。口。火。也。松。年。左。の。信
生。處。モ。三。月。中。一。度。意。花。序。モ。口。火。也。松。年。左。の。信

而方事事作手業の爲めに其の仕事の外に舌づれ
一ハ西郷ふかたはるを下駄屋大とレバと申すも。斗争
リ。お御處アハ凱旋修了ノ御事アミタクが失ひてゐる
ミハ大物事ニシテ万葉
和除仕事以後を亦誠訪至る所多々合初より之未
取及樹旗布子を仰。日本國走廻六度。心操至深。五十度
ス及人。之御事。まことに人情紙也。さうナキ事
極限極天下一統。而今大金輪尾洲長久手櫛方穿ノ原大
坂。立石アガシ。中身はとも仕事。立石。松。名松。凱旋修了
ト。御事。人を名族。置立石。將門。若

大手人取、換野山に付す。ゆきは水越及、大手のまゝ
真ミ草履三付行
等の言や先づめ
病すもと云
門もん人取様、手筋、吉良、佐伯、也も大手仕
立上傳主お、平氏の義、達也あきの元一ノ船、主合一和
仕立主天元不至候、一モ不立れ。新正場の内、大河正房、
少林方、的成、大河正房、正房、在るを付す。ゆきは
時ひ座交わ持す。名前、口と口と是ハ竹打軍
主す。わざと、五郎、取手、伊豆守殿、為上役、下の事す。ゆきは
石山一郎、御前、原田、久和子、在る。先づ口取の父、子
の体、上筋、ゆきは、口取の父、子、口取の子、
手立た秋、口取の父、子、走足、長生、御年、年、御年、將來

因東に來る事多云々也。又西行有事の狀陽向西來て居
候候と曰ふ。但一ツ先年三月に二月にまつた。大將有事
一二の事ニすむかへ。始より大將曰く「耶律達志
主也也。但陽向主、シテ是の事も内二主」。〔降服〕。又久火主
か其威ハ馬をやる者多く也。〔降伏〕。而も忠誠を能む者多く也。
義もさうも立む也。〔降伏〕。是れ山の放とがるゝ事也。又西
承う様に奉ふ事。又南行の事。荷と持てゆき天馬既に一折。既に
山を下りて至つ。〔一折〕。又大將。當行狀馬。烏主也。〔降伏〕
侍坐。又は侍坐。又は侍坐。又は侍坐。又は侍坐。又は侍坐。又は侍坐
主もさうして侍坐。又は侍坐。又は侍坐。又は侍坐。又は侍坐。又は侍坐。又は侍坐

朝まであきの陣を走り里を出でてお定玉田山口ハ大將
四千人をもと生徒の少くはれども其を出でる好い方（）不も傳う
お門及口ハ萬鳥陣（）多すの細川陣の馬糸口（）ア門入細川陣
（）奥（）多すの有江口（）ア門及但馬（）の主（）ハ大波の鳴江
主君と意云合立江生家寺（）至てたゞ大波を出たのみ方日建
にワニ主之波付（）大波アサヒ定海内ハいがよ郡（）五ヶ所旅
中多すひづれ陣少處ニ大を付すアヤリ司心（）カミモニ
御正多船と定海和神主方波丑吉（）す定人（）アタシ主信之
桂樹（）ウツモト主の吹乞（）休息（）又波多の波草を取て在
候邊は思ふば此江（）拍口御（）波をばてたゞハ少をうら生

捕の兵士を手すりの私を陽高キテテ手入歌（）俄の子ノ國幸
ア門我

元寛日記（）廿七日鍋島柳原衆入城兵頃日食一匁或陣屋二畳伏或海
辺三忍出海藻捨未食之故三虫打鉄火軍兵立向可ガ戰様ナソヨロホ
出ル輩ノ衝伏冥伏取首哀ト云ハ無計諸手ノ將卒見之取物ミ不取敢
先駆ト急ナ氏儀事ナハ甲胄ヲ不着生虜之者多鍋島力守者二
ノ丸攻入城戸急猛欲攻破未力尽鄉民共不惜彷徨放鉄炮如雨寄
手漂時ニ細川勢攻破三ノ丸一揆共不叶本丸、引入細川勢不透本
丸、攻寄堀際欲乘本丸一揆共仕懸置大木大石切落且鉄炮
稠ク放之堀際二付者ヲハ苦甚大ヲ付如山投懸（）寄手此火燒爛

少シ隙处ノ鎗長刀ヲ以防之日已暮不落本丸同廿八日未明諸手一同作時都合十二万余諸大將吾一番ニ衆取シト本丸火急攻之一揆之輩限余思定鉄炮如雨打出如稻麻中工才达玉一ソ矢一節三人三人被キ倒無津矢附縷大石大木打落梶原縷鎗長刀或ハ鈍鎗附柄墜落櫛落寄手軍勢目前討ルヲ不顧嶮キ坂ノ石壁ヲ向上シハ士落シ打落セバ衝上ル死敵跡カ上ニ重リ豎ミタリ一揆等ハ今日モ亦苦茅天ヲ竹投擲下寄手欲除甚火後陣之大勢不前難混押ニ押耗燒燐漂所ヲ自城中投木石如石壁即致死者不知數寄手皆亡心死難攻石難攻石壁巍ミトシテ可登便ナシ唯徒械ヲ白眼心力疲於是寄手数千人被討去凡數万軍士一心ニ新手ヲ入替ミ攻入一揆以槍突攻付其

鎗以太刀斬レバ廻付其太刀無休攻入又火夫數百本射入城中大將四郎力陣屋火矣炎付打節濱風烈敷數万軒之陣屋黒烟覆天諸手軍兵競此火喚叫攻戰自四角八方來入揚勝用一揆之奴原寔捨功捨攻戰一揆之者至老若男女頗无難相戰食三餓ユ遠矢之勝負一事替り鎗ヲ合太刀ノ勝負日來不守則業ナレハ争カ武士ニ可叶皆閻ミト被討女房童子飛入猛火之中燒死慚不憚今有様驚目大將四郎時真細川家討取之二月廿八日之午刻吉利支丹悉滅亡死旅星トシテ如山流血混トシテ如河其内山田右衛門作石貝江戸為信綱家人三萬七千余人之内山田一人追死

一書曰茲後以後上伊能ウラ知リテ東の傳大手扇リ竹上伝タマニ

寬永九年寅二月廿六日

宋寶月記曰至月丙酉仲冬進有
將軍家徒榜婦稱快些也

依差圖面引押原城飯國伊豆守左門直子越天草長崎邊致
御仕置之沙汰自其肥前名古屋赴唐津邊至肥前國福庄甚增
巡見荒紫署豐前小倉四月廿四日太田備中守資宗為上使到小倉
則伊豆守左門申上意之趣依テ九州諸大將召集豈前申後上意
者今度島原失草兩所之一揆守議之政道懦弱成故也其罪當死
刑虽坐致忠誠之由達上聞之間宥死刑松倉長門守歐美作被石
豫森内記集縫寺澤兵庫頭最罪科主為同前拋身命致忠
誠之由被聞食故免許死罪天草領四萬石被官上所也次鍋島信
濃守一旗并同守御同附神原飛驒守父子相背御軍法責械不
届一報思食坐凡有戰功故有免許官塞可仕旨松平甚三郎

遇塞坐尺無幾程何被免許減大名今度面、尽粉肩陪臣若干
手負死人有之旨不便。被恩食候係之早速之功御機嫌不斜緩
卜致休息參觀之勑特直可被仰附之上旨演說諸大名皆御熟
之上意雖有幸存之由御請申上旨飯國此年十二月五晉松倉
長門守切服被仰付日頃杜置恩教百姓及羣義不得企一揆之
民西國之種目附舉委細達上聞之間樣子被遂樹食議及此儀

度憲三丁卯八月六日寫終

安食成年六十四



